

| | |
|------------------|---|
| Title | 大英博物館蔵『源氏物語小鏡七』の本文と解説 |
| Sub Title | |
| Author | 辻, 英子(Tsuji, Eiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学国文学研究室 |
| Publication year | 2014 |
| Jtitle | 三田國文 No.59 (2014. 12) ,p.60- 79 |
| JaLC DOI | 10.14991/002.20141200-0060 |
| Abstract | |
| Notes | 図削除 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20141200-0060 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大英博物館蔵『源氏物語小鏡七』の 本文と解説

辻 英子

はじめに

本絵巻は巻七のみの端本である。請求番号JP. 119。二〇一年九月九日に調査の機会を得、二〇一三年一月二十五日付で掲載許可を取得した。ここに記して謝意を表する。

表紙(縦二九・〇×横三一・四糎)は紺地に松・亀などを描く金欄、左肩の題簽に『源氏物語小鏡七』(縦一六・七×横二・六糎)と記し、小豆色の平打紐が付いている。金に牡丹文を彫った軸。見返しは金紙、料紙の詞書部分は、金泥遠山に松竹地文の下絵のある上質の烏子。全長一〇〇八・五糎、詞五段(六 あつまやく十 夢のうきはし)、絵五図から成る。

詞書は、伊井春樹氏が『源氏小鏡』の六十余の写本を六つの系統に分類した第一系統第一類(古本系)に属する。岩坪健氏『源氏小鏡』諸本集成」によると、

伊井氏が調査された六十余本のうち、第一系統第一類に属する写本が最も多く、三十本もある。そのほか私の調査に
より次の二十一件が追加される。(以下略)

とし、そのうち本文が良好なものとして、京都大学附属図書館

蔵(4-30/ケ1/貴)「伝持明院基春(一四五三〜一五三五)筆本」(以下、京大本と略称する)を選び、前掲書に翻刻があり、本書の本文はこれに近い。また、同書には、京大本以降の第一系統(古本系)本として、同氏翻刻による「第四類 国会図書館本(古活字版 WA7/61、元和へ一六一五〜二四〇年間)(国会本と略称)とが収載されているが、いずれも挿絵はない。

本稿は、詞書に関する考察で、大英博物館本(大英博本と略称)の翻刻をし、先の第一系統二書との本文比較を通して、本絵巻の詞書の特徴を探っていくのが目的である。翻刻は、底本をできるだけ忠実に活字化することにとつとめた。改行箇所は原文通り。和歌は京大本および国会本と同じく十四首で、二字下げまたは一字下げで、二行目は直接上からはじめ、地の文と続け書きにしている。本写本には奥書はなく、染筆者および書写年代は分からないが、書風と料紙から江戸初期を大きく下らない書写と考えられる。

その他、挿絵についても今後の研究のために掲載しておきたい。絵は端麗な彩色画で、各帖末に絵一図を配する形態は、バ

イエルン州立図書館所蔵『源氏小かゝみ』⁽⁴⁾（請求番号 Cod. Jap. 14シールポルト旧蔵 第二系統本（改訂本系））と同じである。

その類本の宮内庁書陵部蔵『小かゝみ』（函架番号 谷109）および版本『源氏小鏡』（55244/3/200 338）、『石山寺本源氏小鏡』（石山寺刊 二〇一一年九月）等も同様であるが、いずれも冊子本である。本絵巻は原初から卷子装であったと見られ、挿絵については、ことに「六 あつまや」、「七 うきふね」等はこれらの冊子本とは大きく異なる構図であることに注目しておきたい。

本絵巻七は、恐らくは源氏五十四帖の内、宇治十帖分の後半五帖に当たると考えられる。六巻は「一 はしひめ」から「五 やとり木」までであった可能性は高い。一から五は「桐壺」から「竹河」までが収められていたことはほぼ間違いない。いずれどこかに眠っている一から六までが揃う日が期待される。

注

- (1) 『源氏小鏡伝本考—古本系から改訂本系へ—』『国語と国文学』昭和四十二年九月号 東京大学国語国文学会 一六頁
- (2) 『源氏小鏡』諸本集成』和泉書院 二〇〇五年 七六六頁
- (3) 『古活字版『源氏小鏡』（国会図書館蔵 解題・翻刻）』（『親和国文』35 平成十二年二月。同書「注（2）」に再録）
- (4) 拙著『在外日本重要絵巻集成』笠間書院 二〇一一年 一五二—三二六頁
- (5) 拙著『在外日本重要絵巻選』笠間書院 二〇一四年 八八九頁

『源氏物語小鏡』詞書

光源氏物語目録

- 六 あつまや
- 七 うきふね さむしろともいふ
- 八 かけろふ
- 九 手ならひ
- 十 夢のうき橋のりの師ともいふ

光源氏物語巻第七

六 あつまや

此まきあつまやといふ事かほるの哥に
三てうわたりなり

一さしとむるむくらやしけきあつまやの
うたてもかゝる雨そゝきかなといふ哥なり
是はみやのきたのかたほかにかたりいたし
たりしひめ君をはゝさえ（こんノ誤認カ）の少将とい
ふひとをすてにむこにとらんとせし

そかしそれをひたちのかみきゝつけて
ほと／＼につけていとよきむこと思ひ
てやらん我むすめにひきこしてむこに
とるはゝいとくちおしくおほして宮のきた
のかたへつれてゆきてあつけ聞ゆこの
きたのかた御ゆとのゝまに宮さしのそか
せ給ひてとかくいひより給ひしほとに（第1紙）

めのとあさましくおぼしては、につけ奉
れはおとろきて三条わたりにいとあら
あらしきこ家をもちたる所にてかくしを
きぬさて大将とのうちへおはしてかの
弁のあまをまつやとり給ひて我もかの
三てうのたひところへおはしたりとの
人ひかしこゑにてたそやなどの、しり
とかめしときの哥也かくてそのあかつき
わかくるまにのせてうちへつれておはし
てすませ給ふたひのいゑなと、いふ事は
むくら雨そゝき あつまや とのゐ人なと、
いふへし雨すこしふりたりし也ころは九月
なりさて大将はしはく、うちへかよはせ
給ふこよなくさむ心あらんかし (第2紙)

(絵一) (第3紙)

七 うきふね

此まきうき舟といふ事うきふねの君の
哥に

2 立花のこしまかいもかはらしをこの
うきふねそゆくゑしられぬといふ哥の
心也此ゆへはあつまの君をかほるいさなひ
てうちにとりをきてときくかよひし
ほとに兵部卿の宮かのきたのかたの御
ゆのまにほのかにみ給ひし人をいかな

る人ならんとわすれかたき秋のゆふへに
てきたのかたにもとひたてまつり給へ
ともとかくいひまきはしてすきゆ

き又のとしの正月に宮この御かたへお
はしてわか君のとしまさり給ふをうつく

しく見おはしましてうちとけておは
しますにうちよりとてうつちいふは

正月はつうの日なりと物を
人々にふる也やはたよりまいるひけこまつにつけて
文をとりそへて御まへなるわらはもちて

まいりたり宮いつくよりのふみに
かとてうたかはしきにとりて御らんす

れはいとわかやかなる女のでなりあや
しくおほす大しやうこそうちへつねに

かよひ給へいかならんとこゝろにかけて
御いゑ人にくはしくたつね給へはしか

く、と申ありし御ごさやするのまにほの
みし秋のゆふへおほしあはする事

ともありてしのひていて給ふまつほ (第4紙)
そきあなよりのそきて御らんすればわかきた

の方にも覺たり人しつまりて後大将のおはし
ましたるまねをしてみちにていみしくはち

かましき事あり返々人にしらすましとさ、
やかせ給ふ御こゑいとよくまねひよせ給ふ

ぬれしめりたる御にほひ何ともまかふへくも
なしうこんといふ女房いて、つかまつるさてき

丁のうちへ入ても大将のおはしたりと思ひ
て打とけぬればあらぬ人也あさましくなき
給へともかひなし匂ふもお(い)かノ誤ほるも思ふもわかぬ
契とは是也あかつきかへらんとおほしつれとも

更に立はなれかたくまことにしぬへくおほし
ゐて御身をすてゝその日はとゝまり給ふそ

のおりこそ右こんはしりてあさましく思へ
とも夜はたゝあけにあけぬればかなはず

さまくゝおそろしき事ともをかまへて右近
そのへやりけるさて心しつかにとゝまりて

あさからぬ御ことの葉をつきせず時のまも
みすれはいかゝせんとこかれ給へは女も思ふには

是そいふにやと覺して空おそろしくかなし
な(初)しけれともうちなひきなとせしにや

さてその暁そせん方なくかなしなからを
のかきぬくひやゝかに風の音もいとあら

ましくしもふかきあかつきにおきわかれた
まひ(い)にて馬にて帰給ふその折宮の御哥

3世にしらすまとふへき哉先に立涙もみちを
かきくらしつゝ御返事うきふね

4涙をもほとなき袖にせきかねていかに別
をとゝむへき身そなといひかはし給ふ思わ(第5紙)

かぬ事などにはつくへし人たかへなとゝも
云へしかくてもなを恋しさはせん方なく

ていかにすへきやうなくて宮御ものいみ何

やとかこつけ給ひて又忍ひて出給ふこゝの
人めもさすかにて川よりおちに御やとを

とり給ひてちいさき舟にのりてさしわた
すにはるかなるきしに漕はなれたる心ちし

ていと心ほそし有明の月すみのほりて
水のおもてくもりなきに是なん橘の小嶋

と申て御舟とゝめたるをみ給へは大やかなる
いた(い)のさましてされ時は木の陰しけりかれ

見給へは千世をふへきみとりのふかきをと
のたまひて宮

5としふともかはらん物か橘の小嶋かさきに
契る心はとの給ひし御事そかし此うき舟に

とはさてこそうき舟の君いひけれさてふね
よりいたきおろさせて御やとりにて御物

いみ二日たはかり給ひたりしかは心しつかに
おはしてあやしきすゝりめしいてゝ御多など

かきすさみて女おとこもろとも打そひ
たるをかきて常にかくてあらはやと御涙

をうけての給ひし御涕さこそわすれかたく
有けめいゑにあしる屏風たてたりし也

そのことは すゝり 絵 川より おち宿
あしる屏風 是らうち川よりおちなといふ

ことにつくへしたとへなくなかき日にもろ
とも詠いたし給へは雪いみしくつもりて
かきもとなどにはともまつ雪もきえかたく

つもりてかのわかすむかたをみやり給へは (第6紙)
霞たえく／＼に梢はかりそみゆる山はかゝみを
かけたるやうにきら／＼と夕日のかゝやきたる
をよ人〔へ〕ノ誤認カゝわけこし道のわりなきを哀おほくそへ
てかたり給ふそのおりの哥そかし

6 峯の雪みきはの氷ふみ分て君にそまよふ
みちはまよはずといふ哥何事にも面白き
例にいふ事也此も川よりおちのことなれ
はとりあはせてつくへしそのゝち又薫大
将おはしましたり空はつかしくかなしく
てうちしつまりてみたるを大将まとをな
るをさらぬやうにてうらむるこそと心くるし
くこよなくもてつけたるかなといとゝ心
まさりして哀もふかくおほしめして一日ころ
夕つくひにもろともにはし近くよりふして
なかめいてし給へはおとゝはすきにしかたの
ことを思ひいたしてかたみにも思はし山の
かたは霞へたてゝ寒きすきにたてるかさゝ
きも所く／＼はいとおかしうみわたさるゝにしは
つみ舟のところく／＼行ちかひたるなとほのかに
てめはなれぬことのみとりあつめたる所なれ
はみるたひことになをあたるところのことのみ
只今の心ちしてこよなきなくさみもこの
世のみかはと哀にてこひしかなしとおり
たえねとも常にあひみぬほとくるし

さをよきほとに打かたらひて哥に薫大将
7 宇治橋のなかき契はたえせしをあやふむ
方に心さはくなとよみしなりされは
かさゝき 柴舟なとうちには候へしかく

て二三日してかへり給ふにも倮こひしく (第7紙)
思ふもいとおこましくさそ宮より御心もあ
くかれて例ならすさへおはしけり御文の通ふ
も所せきほと也大将のつかひと宮のつかひ
とたひく／＼行逢ひしかはそれより事あらは
れて大将の方よりとのゐ人すゑなとして
いとぎひしくもてなす聞あきらめて大将
のもとよりかの宮の御ことをうらみて

8 波こゆるころともしらて末の松まつらんとの
み思ひける哉とうちへの給ひおこしたる事
あらはれ給ひぬ思ひなげくさまいとくる
し宮の御つかひのあらはれしおりの文の
色は桜につけてあかきしき也是もあらは
るゝ心なとにつかはさくらにつけしなとゝいふ
へしさてうき舟思ひしつみ給ひていかゝせん
と身をうらみけるに宮おはしてあんない
し給へともとのゐ人きひしくてうちへも入
奉らすとかくいひて御つかひうこんにあい
たり出へきやうもなければ侍従とてうこん
もとうしんなる女房を宮のおはします所へ
奉るに御ともの人のおまにのせんとすれと

えのらねはわかくつをはかせてきぬの
すそをとりて立そひてまいる宮は御馬

してとをたち給へる所へつれてたちて

物の給はんとし給ふ所もひんなければむまの

あをりをしきておとろむくらのしけき山賤

の家ゐの軒のしたにおろし奉りてなく

く物の給ふにさとひたるいぬのこゑに

おとなふも心ほそくおそろし是ら此巻

にて面白きくにてよりあひにもよく候 (第8紙)

へし山賤の軒のした さとひたるいぬ あを

りしきなといふ事浮舟うちなとに付へし

さてなくく宮帰らせ給ふしう御有さまを

かたりければ女枕もうくはかり也かくて大將人

はなれたる所にきたれはこそ宮もおはし

ませとて急むかへを奉らんとてつくり給ふ

宮はそれよりさきにむかへとりて御心のまゝ

にとおほして御めのとの家九条わたりに有

所へうつろはせなと人しれすかまへ給へは女

はいかゝなりはつへき身にかとこかれまさりて

とにかくにわか身をなき物になさはやと

思なりけりことほりなりや川のをとなひ

をきくにもわか身のをき所哀にてうす

ころもにはかまはかりきて人のねたるまに

つまとをしあけてゆくへきかたもしらす
袖をゝしあてゝよゝとなきてえんよりあし

をふみおろしておにてもかみにてもかの宮

とおほしき男のなをしすかたなるか出きて

いさゝせ給へとてかきいたきてゆく是は小玉

也とりもてゆきて平等院のうしろに

大なるこのもとにすてたりしを小野の (第9紙)

あまはせよりけかうにこのひやうとう

るんにやとりたりけるか見つけてと

りて小野へゆきてやうくかちして

なをさせいたはりて人になしてのち

にこそあまになりしかされはうち

にこたまといふ事も候へしこたまにとら
れしころ三月のすゑの事也

〔絵二〕 (第11紙)

八 かけろふ

此巻蜻蛉といふ事此うき舟跡かたなくうせて

のち薫よみ給ひし也かけろふの飛かふをみて

9 ありとみて手にはとられぬはかなくて向後も

(第10紙)

知す消しかけるふとよみ給ひし故也さてうき
舟は、をたに残さずあとはかなく成しかはは、
のなけきをしはかるへし人めもあさましくて
残し置たりける御ふすまてうとなとをそとり
あつめ鳥部のにをくりゆくゑなくけふりと
なす也かけるふといふ事あらはあとかたなき
水のあはときえし残るふすま煙なるらん
なと、やうに云へし宮はひたすら此なけき
にふししつませ給ふ侍従といひし女房あ
をりしきて物かたりし給ひしおりの女はう也
是をのちには宮の御かたへよひ給ひて御
は、中宮の御かたにさふらはせてこよなき
かたみに御らんしける (第12紙)

〔絵三〕 (第13紙)

九 手ならひ

此まき手ならひといふ事はうき舟小野の尼に
つれられてをのに住けりあらぬ世にむまれ
〔たる「脱カ」心ちして誰に我身のことをも故郷のことをも
いふへきなれば只つくく〕と手習をして硯
にむかひて思ふ事をうたにもよみし也此巻
を手ならひの君といふと心ふへし小野のあまの
とりしはしめは此尼は八十はかりなるは、なと引
つれてはせへ参りてけかうにうちにとる

此あまのあに山にたつときひしりにて有も
つれたりける程にうしろの木のもとにあやし
き物ありなと、の、しるゆきてみれはいと
うつくしきわかき女のしろきあやのうつり
かもなへてならぬあかきはかまきたりあま
はせにて夢をみたりとて此ひしりにかち
せさせなとしてつれてゆきてもてなし
いとをしみけるほどに此あまのむすめはかな
くなりたりしかむこ昔を忘れず常に
きけるか此人をみてむかしの御かはりにといひ
わたりけるをむつかしきことに思ひて尼の
又はせへ参りたりけるまに山よりひしりく
たり給ひたりけるにいひて尼に成たりけり
かくてさまく都のことも思ひ出しつ、身を
なけんとして出たりしに宮と思ひし人につれ
られてみし程に身の向後はしらすいか、な
りけむとあさましくて

(第14紙)

10 身をなけし涙の川のはやき瀬にしからみ
かけて誰かと、めん月のおもしろきに
つくく、なかめて

11 心には秋の夕をわかねともなかわる袖に
露そこほる、秋ふかくなりゆけは大かたの
空のけしきも哀なるにまして物思ふ袖の
上思ひやるへしすむ所はかの夕霧の宮す所
のおはせし山里よりは今すこしの入て山に

かけたる家なれは松陰しけく風の音いと心
ほそし門田のいねをかるとてわかき女もの
うたひ物まねしつゝひたひきならずも
しあつまちの心ちしてあはれ也月のあ
かき夜うちなかめて

12 我かくてうき世中にめくるとも誰かは知らん
月のみやこにことにふれつゝ宮の御佛の忘れ
ぬもあさましきりともわすれははて給はし
と思ふにもいと哀也春にもなりぬれはいと
むかしの春のみこひしくて闇のつまちかき
こうはいの色も香もかはらぬも春やむかし
のとこと花よりもこれに心よせらるゝは
あかさりし御にほひのしみにけるにやと
我なからあさまし (第15紙)

13 袖ふれし人こそなけれ花のかのそれ
かとにほふ春のあけほのさて大しやう
おもひかけぬゆかりにきゝいたし給ひ
てたつねたまふ小野には此哥ことは
を思ひよそへてつけ給ふへし

〔絵四〕 (第17紙)

(第16紙)

十 夢のうきはし

此巻ゆめのうき橋といふこと源氏わか御さかりの
栄花をはしめ御身のさいも世にこえしな
たかくむまれ給ひて御かたちは光とさへいは
れ給ひて御心にのこる所なくいみしくお
はせしことも夢のことくにてたゝ一ふしの御な
けきせんちしきにして雲かくれ給ふ又かやう
にことはおほくつくり出せる物語もはては
むしやうを知せん為なれば夢のうきはしと
いふ心也はしをことはのやすめに夢の浮橋
といへりひたちのかみかこをむかしのなくさめ
にめしいたしつかはせ給ふを御つかひにて
御ふみをのへつかはさるゝするへなくて
はいかゝとてかの人をめしあまになしなと
せしそうつにおほせ文をこい大将の御文
にとりそへてゆきし也大将の御ふみに
14 のりのしとたつぬるみちをしるへにて思はぬ
山にふみまよふかなとありしなからの御手に
て御にほひもさなかななるをみしてならひ
の君の心のうちさこそありけめ御返事
もいかにそやあきれぬるやうにてとて
なしとほんには候也そのゝち山ちの露
といふ物をつくりて侍ければ五十四帖の
ほかなれは是には候まし

〔絵五〕 (第19紙)

大英博物館蔵本および京都大学蔵本と国会図書館蔵本の
詞書異同

校異にあたり京大本(略称)および国会本(略称)は、岩坪
健翻刻(『源氏小鏡』諸本集成)所収を用いた。

大英博本を基軸にし、カッコ内に、京大本および国会本
(京、国と略称)の異同は……線で、国本のみ場合は……線
で表す。

ただし、京大本が大英博本に一致する場合、京大本||国会本
の場合は原則として特に記さない。

「お・」を、「ひ・」「い・」「ゑ・」「へ・」「い・」「あ・」「む・」
「ん」等の表記の異同は省く。

文の特徴を把握するための覚書として、次の記号を用いた。

□大英博本のほうが、源氏物語原文(日本古典文学全集・青表
紙本へ本文は、伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本等
を底本とし、これを『源氏物語大成』校異篇所収の青表紙諸本
と、その他数種の青表紙諸本とによって校訂したもの)以下。全
集と略称する)に対応している。

◇京大本のほうが、源氏物語原文(原文と略称する)に対応し
ている。

○国会本のほうが、原文に対応している。

*京大本は大英博本より叙述(助詞、指示語等)がおおいが、
なくとも意は通る。

☆大英博本のほうが意は通る。

十京大本のほうが大英博本より意は通る。

△異なった意味内容になる。

●大英博本・京大本・国会本間の振幅の大きい語彙の異同、あ
るいは文の異同を示す。

六 あつまや

1三てうわたりなり(ナシ)(第1紙第2行)(全集⑥七七)小
さき家まうけたりけり、三条わたりに」□

2うたてもかゝる(国同じ。京あまりほとふる)雨そゝきか
なといふ哥(「ゆへ」アリ)なり(1・4)(全集⑥九一)

「あまりほどふる」◇

3みやの北のかたほかに(「かほるにカ」)国「かほるに」かた

りいたし(「給ひ」たりしひめ君をはゝさえ(「こん」を

「え」と見たか。京「さこん」。左近少将国「左近少将」の少将

といふひとを(1・7) +

4宮のきたのかた(「の御もと」)国「の所」へつれてゆ

きてあつけ(国「きと」)聞ゆ(1・11) +

5御ゆとのゝま(あひた。国「御ゆのひま」)に宮(国「には

ふみや)さしのそかせ給ひて(国「さしのそきて」)(1・

14)

6三条わたりにいとあらあらしき家(きたいゑ。国「小家」)

を(全集^⑦七七。「小さき家設けたりけり。三条わたりに、」

(2・2)3) □○△

7もちたる所にて(ナシ)(2・3)

8ひかし(あつま)こゑにて(2・7)(全集^⑧八三。「賤しき

東国声したる者どもばかりのみ」◇○

9のゝしりとかめし(京同。国「くけり」(その)ときの

哥也(2・8)*

10たひのいゑ(国「やと」)なと(ナシ)いふ事(に)は

(2・10)

11雨(の。国ナシ)すこしふりたりし也(2・12)*

七 うきふね

1こしまか(国「こしまは」)いろも(4・3)

2あつま(や)の君を(4・5)

3とかくいひまきらは(か)してすきゆき(く)(国「すきゆ

き給ふほとに」(4・11)12)

4うつくしく見(み)おはしまして(国「いつくしみおはしま

すを御らんし」(4・13)14)

5うつち(国「うえら」。京「うつえ」)(割注)うつ(え)と

いふ(事)は正月はつうの日なりと(大りにうつえといふ)

物を人々にふる(たまはる)也やはたよりまいる(なり)」

(国、割注部分ナシ)ひけこ(国「くにし」)まつにつけて

(国「くたる」)文を(4・15)17) ●

6女の「の」ナシ。国「女の」ナシ)てなり(4・20)

7御いゑ人(けにん)に(4・23)

8ありし御やするのま(ゆするあひた)。国「ゆのひま」に

ほのみし(く給し。国「ほのかに見給ひし事」)秋のゆふへ

(4・24)25) 大英博本「御や」は「御ゆ」の誤写か。

9御にほひ何(な)とも(5・6)

10き丁のうちへ入ても(京・国「くた」)大将のおはしたり

(る)と思ひて打(京・国「より」)とけぬれば(5・7)

11句(に)ほふ。国「にほひ」もお(か)ほるも(5・10)「お

ほる(溺る)一心を奪われる」ではなく、句の対であるから

かほる(薫)であろう。

12しぬへくおほしみて(まとひて。国「しみぬへき心地なれ

は」(5・12)13)

13思ふに(と)は是ぞ(を)いふにや(5・18)19)

14かなしかなし(ナシ)けれともうちなひき(国同。京

「く」)なとせしにや(5・19)20)

15(御)馬にて帰給ふ(5・24)

16思わかぬ事などにはつく(け。国「付」)へし人たかへな

と(ナシ。国「と」)も云へし(5・28)6・2)

17せん方なくて(国同。京ナシ)いかに(京・国「く」)す

へきやうなくて(京同。国「なきま」)(6・2)3)

18御ものいみ何やと(なとに。国「に」)かこつけ給ひて

(6・3)4)

19御やとをとり給ひ(ナシ)てちいさき(京同。国「小」)舟

にのり(京「く給ひ」)て(6・5)6)

20漕はなれたる(国同。京「たらん」)心ちして(6・7)

21いた(は。「は」の誤認)のさまして(しく。国「して」)

され(京「たる」。国「ける」)時は木の陰しけ(れ)り
(6・11)

22 みとりのふかき(さ)を(略)小鳴かさきに(6・12)14)

23 の給ひし御(返)事そかし此うき舟に(そ)とは(国「まへ
にうきふねと読みしは」)さてこそうき舟の君(く)など々も。

国「とも」いひけれ(国「申けれ」)(6・16)●

24 さて(国「君を」ふねよりいたき(国「申しうけ」)おろさ

せ(国「し」)(給ひ)て(6・17)●

25 御物いみ二(三)日(6・17)18)

26 心しつかにおはして(ナシ。国アリ)(6・18)19)

27 御多なとかき(ナシ。国アリ)すさみて(6・19)20)

28 (この)いゑに(6・23)

29 あしる屏風(を)たてたりし也(国「立たるなり」)(6・

23)

30 是ら(国「これは」)(み)な(国「ナシ」)うち(くの。国「の」

ナシ)川よりおちなといふことにつく(け)へし(国「の心

によせへし)たとへ(し)なく(国「たとくしく」)なか

き日に(国「に」)ナシ)(6・25)26)●

31 かき(くの)もとなとは(6・28)

32 かの(ナシ。国アリ)わかすむかたをみやり給へは(6・

29)☆

33 霞(の)たえく(に)(7・1)

34 夕日の(国「ナシ」)かゝやきたるを(に)よ人(へ)ノ誤写

(へ。国「く」)わけこし道のわ(国「は」)りなき(京

「き」。国「さ」)を(7・2)3)

35 君にそまよふみちはまよ(国「まと」)はず(7・5)6)
(全集⑥一五四「道はまとはず」)

36 此も川(国「宇治川」)よりおちのことなればとりあはせ

(国「わき」)てつく(け)へし(京「ころは、春なり。「は
るのゆき」に、つけへし」ノ十六字アリ。国「ころは春也。

「春のゆき」などよし)トアリ)そのうち(それより。国

「其後」)また(国「また」)ナシ)(7・7)8)●

37 かなしくて(ナシ。国アリ)(7・9)10)

38 たいしよう(くは(略)うらむるこそと(に。国「うらむ

るこそと」)ナシ)心くるしく(て。国「て」)ナシ)(7・

10)12)●

39 哀もふかくおほしめし(ナシ。国アリ)て(国「て」)ナシ)

(7・13)

40 はし近くより(うち)ふしてなかめいて(た)し給へは

(7・15)

41 おと(こ)はすきにしかたのこと(三字ナシ。国アリ)を

思ひいたしてかたみにも思はし(くき。国ナシ)くすさき

にたてるか(ナシ)ささきも(7・15)18)

42 ぼの(ナシ。国アリ)かに(国「し」)てめは(ナシ)なれ

ぬ(7・19)20)

43 みるたひこと(ナシ)になをあたるところ(そのかみ)のこ

とのみ(国「みるまなく、日ことに、そのかみの事のみ」

(7・21)●

44 こよなきなくさみ(めに。国「み」)も(7・22)

45 おりたえ(く)ねとも(7・23)24)

46 (さま) よきほとに (7・25)
47 なかき契はたえせしを (と) (7・26) (全集⑥一四五)「朽ちせじを」□

48 柴舟なと (と)も。国「も」ナシ。うちには候へしかくて (つ) けへし。国「付へし。かくて」 (7・28) (29)

49 いとおこかまし (ナシ)。国「いとおこかましおほえけり」さそ (て) 宮 (と) それ。国「はそれ」より御心 (も) あくかれて (国「あこかれて」) (略) 御文の通ふ (ひ) も (8・1) (2) +

50 宮の (と) 御) つかひと (8・3)

51 大将の方よりとのる人す多なとしていと (き) (さ) (ひ) しくもてなす聞あきらめて (国、二十六字ナシ) 大将の (御。国ナシ) もとより (国「かたより」) (8・5) (7) ●

52 思ひなけ (ひ) (く) さまいとくるし (国「思なけきのさま、いとくかなし」) (8・10) (11) ●

53 あかきしき (し)。国「れうし」也 (8・12) +

54 浮舟思ひしつみ給ひ (みたれ) て (8・14)

55 宮 (と) おはして (8・15)

56 うこんもとうしん (とおなし心。国「と同心」) なる女房を (8・18) (19)

57 宮のおはします所へ奉るに (ナシ) (8・20)
58 宮は御馬してとをたち給へる所へつれてたちて (京、十九字ナシ。国「御むまにて、とをくたち給へる所へつれて参るに」) 物の給はんとし給ふ (国「とに」) 所もひんなければはまのあをりをしきて (8・22) (24) ●

59 さとひたるいぬのこゑ (と) (略) 是ら (と) 此巻にて (と) 面白きくにてよりあひにもよく候へし (く候) (「是ら」以下、国「是を此巻の面白きより合と、申つたへたり」トアル) (8・27) (9・1) ●

60 あをりしき (と) なといふ事を (ナシ) (9・1) (2)

61 さてなく (と) (と) むなし。国ナシ。宮帰らせ給ふ (国「さて宮、むなしくかへり給ふ」) (9・3)

62 急むかへを (ナシ) 奉らんとて (殿。国ナシ) つくり (国「つくり給ふ」) (9・6) +

63 いかなりはつへき身にか (ナシ。アリ) と (9・10) ☆
64 わか身のをき所 (と) 哀にてうすころも (ききぬ) に (略) 人のねたるま (あひた。国「ま」) に (9・13) (14)

65 (かほに) 袖ををしあて (9・16) +

66 おに (と) てもかみにても (と) われをつれてゆけかしと なきいりたるに (国「なけきけるを」) 以上十八字アリ) かの (国「かの」ナシ) 宮とおほしき男の (9・17) ● ☆

67 大なるこ (き) のもとに (9・21)

68 やうくかちして (ナシ。国アリ) (10・3)

69 人に (ナシ。国「と」) なしてのちに (ナシ)こそ (略) 候へし (く候。国「有へし」) (略) 三月のすゑの事 (ナシ) 也 (10・4) (7) ☆

八 かけろふ
1 よみ給ひし也 (ナシ) (国「読給ひし歌なり」) (12・2)
2 ありとみて手にはとられぬ (す) はかなくて (京同。国「みればなし」) 向後も知す消しかけろふ (12・3) (全集⑥

二七五「手にはとられず見ればまた」◇○

3よみ給(ナシ)ひし故也(12・4)

4は「から」の誤写)をたに残さず(12・5)◇○(参考)

全集⑥一九四 浮舟、告別の歌「からをだにうき世の中にと

どめずはいづこをはかと君もうらみむ」

5は「の」(ナシ。国アリ)なけきをし(国「いでし」)はかる

へし(12・5〜6)☆

67てうと(ナシ。国「てうと」)なとをそ(12・7)△

7鳥部のにをくりゆくゑなく(〜)ぎ。国「おくりゆきてなき」

けふりとなす(なしゝなり)(12・8)

8のこるふすま(や)煙なる(京アリ。国「る」ナシ)らん

(12・10)

9なと(ナシ)やうに云へし(12・11)

10宮はひたす(そ。国「す」)ら此(御)なけきに(12・11

〜12)☆

11御らんしける(り)(12・16)

九 てならひ

1むまれ(たる。国「いきたる」)心ちして(14・2〜3)+

2思ふ事を(も。国「も」ナシ)うたにもよみし也(きて)此

巻を(14・5)

3手ならひの君といふと心ふ(う)へし(国「〜云なり」

(14・6)

4のゝしる(り)(略)しろきあやのうつり(ナシ。国アリ)

かもなへてならぬ(に)(14・11〜13)☆(全集⑥二八六)

「香はいみじうかうばしくて」

5かちせ(ナシ)させなとして(14・15)

6むすめはかなくなりたり(ナシ。国アリ)しか(ナシ)(国

「此」むこ、昔を忘れず(をのへ)常にきけるか(国「つ

ねに小野へかよひけるか」(14・16〜18)

7尼の又(ナシ。国「又」)はせへ参りたりけるまに(14・19

〜20)

8つれられ(ナシ。国アリ)て(ゆくと)みし程に(〜ほとよ

り。国「みしより」(14・23〜24)

9はやき瀬のしからみかけて誰かとゝめん(し)(14・26

〜15・1)(全集⑥三〇二「誰かとどめし」)◇

10つくく(と)なかめて(15・2)

11なかむる袖に露そこほるゝ大かたの空のけしき(国同。

京「けはる」も(15・3〜5)(全集⑥三〇一「空のけしき

も」)◇○

12山里よりは今すこしの(ナシ。国「ひき」)入て山に(かた

かけたる家なれば(15・7〜8)

13風の音(〜)も。国ナシ)(15・8)

14門田(京「いとた」・国「山田」)のいねかるとて(15・9)

(全集「門田」⑥三〇一「門田の稻刈るとて」)□

15わかき女(〜)に。国「に」ナシ)ものうたひ(15・9〜10)

16物まね(京「〜ひ」。国「ひ」ナシ)しつゝ(15・10)(全集

⑥三〇一「ものまねびしつ」)◇

17月のあか(京「〜つ」・国「つ」ナシ)き夜うちなかめて

(15・11〜12)(全集⑥三〇一「月など明き夜は」)◇○

18ことにふれつゝ(て)(15・14)

19 わすれははて給はしと思ふに(ナシ)も(15・15〜16)
20 いと(〜)むかしの春のみ(国「と」)こひしくて(15
・16〜17)

21 袖ふれし人こそなけれ花のかのそれかとにほふ(国同。京
「おもふ」)春のあけほの(16・1〜2)(全集⑥三五六「花

の香のそれかとにほふ春のあけほの」にほふ青・河・別)□□
22 思ひよそへ(せ)てつけ給ふへし(以上、国「おもひよせへ
し」)(16・5)

十 夢のうきはし

1 せんちしきに(と。国「とおほ」)して(18・6)

2 夢の浮(ナシ。国アリ)橋といへり(国「いふ也」)(京「さ
て、このまきに、大しやう、きゝいたし給ひて、この(国ナ
シ)てならいのきみのおとゝ」三十二字アリ)ひたちのかみ
かこをむかしのなくさめにめしいたしつかはせ給(18・9
〜11)●

3 御ふみををの(きたの)へつかはさるゝしるへなくては
かゝとて(国、以上二十五字ナシ)かの人(国「君」)をめ
し(ナシ)あまになしなと(国ナシ)せしそうつにおほせ
(て)文をこい大将の御(ナシ)文にとりそへてゆきし也
大将の御(ナシ)ふみに(略)大将の御ふみ(うた。国「大
しやう、文の歌に」)(18・12〜15)△●

4 のりのしと(国「も」)(18・16)

5 そのうち山ちの露(国「の露」ナシ)といふ物を(京
「〜」人のつくりてたつねあひてたいめんし給へると)二十
一字アリ。国「〜」人のつくりおきたるには、「たつね合て、

たいめんし給へり) つくりて侍ければ、「はんへるそれは」。
国「たいめんし給へり」と、かき侍るにや」(それは)五
十四帖のほかなれば是には候まし、「かきいれすはんへり」。
国「有ましく候なり」(18・21〜23)△

検証結果の分析

一 各本が『日本古典文学全集』の本文に共通部分を有する場合

□ 六ノ1、六ノ6、七ノ47、九ノ10、九ノ13、九ノ16、

九ノ20、

7例

◇ 六ノ2、六ノ8、八ノ2、九ノ8、九ノ15

○ 六ノ8、八ノ2、九ノ10、九ノ16、九ノ20

5例

大英博本と国会本とに共通する語彙に傍線^{.....}を付した。

二 *、☆、△等の記号の内容については、校異を参照されたい。

三 大英博本、京大本、国会本の欠文について

イ 大英博本・京大本にあり、国会本にない場合

七ノ5「枕草子」八七・職の御曹司におはします頃、

西の廂にて「御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる
卯槌ふたつを、卯杖のさまに頭などをつつみて」とある。
卯槌・卯杖いづれも正月初の卯の日に邪気をはらうまじ
ないとしたもの(全集 一三二頁)。枕二五「はかなき薬玉・卯槌、

などもてありく者」(全集 六七頁)。「源氏物語」浮舟「右
近から大輔への文」若宮の前(おまえ)にて、卯槌まゐら
せたまふ」(全集⑥一一一)

「卯槌をかしう、つれづれなりける人のしわざと見えたり」(全集⑥一一二)。

七ノ38/「うらむるこそと」の句はない。

七ノ51/国本の欠文・二十六文字に当たたる箇所は、大英博本および京大本の「大将の方より」大将の(御)もとより」の間に該当するので、類似の句「大将の」に目移りのよる脱文と考えられる。およそ二行分にあたる。

十ノ3/語り手が原文の意をとり要約したもの。国会本には「二十五字」を欠くので、薫大将が浮舟の弟小君を遣わすにあたり、後文の僧都に紹介状を乞う次第に繋がらない。脱文と考えられる。

これは、大英博本が国会本によらぬ証。原文には、全集⑥三八五「かしこには」小野の家を指す。全集⑥三八二「小野には、いと深く茂りたる青葉の山に向ひて、紛るることなく」と思いにふける女君、おりしも、横川に僧都を訪れた薫の帰途、都に急ぐ薫一行を、浮舟や小野の人々が眺望する様を描く。

口 大英博本・国会本にあり、京大本にない場合

七ノ58/全集⑥一九〇「宮は、御馬ごまにてすこし遠く立ちたまへるに(略)、この侍従さむらひを率て参る」(青表紙本原文(以下、原文とのみ記す)を踏まえる)とみられる。京大本には、この情景はない。

十ノ21/「とほんには候なり」(本を書写した人が、「底

本にこうあります」と写本の末尾に加えたもので、原文はここまで。以下、「そのうち山ちの露といふ物をつくりて…」は原文をはなれた語り手の感想。

ハ 京大本・国会本にあり、大英博本にない場合

七ノ36/原文にはなく、語り手の考えとみられる。それを、大英博本が採用しなかったのか、省いたのかは不明。

七ノ66/原文にはなく、語り手の語。大英博本は、文意が通らないので、十八字・一行分相当の脱文があると考えられる。

十ノ2/原文の要約。京大本・国会本にあるおよそ二行分相当の三十二字のあるほうが、意をとりやすいが、なくても意は通る。大英本の省略か。

十ノ5/大英博本には、京大本二十一字に当たたる文がないが、意はとおる。省略か。脱文とすると「物をつくりて侍ければ」と京大本「人のつくりて」と類似表現による目移りによる誤写とみられる。

このようにみてくると、第一系統の三書は、校異作業が可能な程度の近似性があることが明らかになった。各作品が『源氏物語』青表紙本原文に符合する率は、「一」で見えてきたとおりである。

三イの四例についてみると、大英博本および京大本に共有する本文が国会本にない場合である。ことに「七ノ5」の割注記

「卯槌」のことは浮舟の原文にも詳しく記すところで、国会本に記載がないのは見過しにはできない。それにより大英博本と国会本には、語彙上の共通性は認められるものの、国会本に四例の欠文があると推察される点で、これは少なくとも大英博本は国会本に拠らない証に数えてもよいのではなからうか。三口「七ノ58」は、匂宮は御馬に乗りながら侍従を待つ場面は記述されていないが、なくても意は通る。省略か。「三八」の四例の内、「七ノ36」を除く三例は、大英博本の省略か、脱文かは判然としない。

以上は、①文に飛躍があるので脱文か、②意は通るので省略か、③不明、と仮定して点検してきた。こうした誤記・誤脱の可能性は各書に認められ、国会本にややおおいように思われる。これらの徴は各書が転写本である証と考えられよう。

ところで、語彙異同の一因は、底本の違いからくるものだろうか。『源氏物語大成』第六冊 校異篇に拠つて整理してみると次のようになる。語彙の符合する場合は、ゴチで示した。

六ノ2 うたてもかゝる (大英博・国会本 典拠不明) / あまりほとふる (京大本) ↓あまりほとふる【青表紙本】(大島本底本) 飛鳥井雅康筆 大島雅太郎氏蔵・河内・別本

七ノ1 こしまか (国こしまは) いろもーこしまのいろは【青表紙本】(池田本底本) 伝二条為明筆 桃園文庫蔵・【河内本】。国「こしまは色も」【別本】こしまいろは陽明家本ーこしまは色も麦生本

七ノ22 小嶋かさきに (各同)ーこしまのさきに【青表紙本】

七ノ35 ↓こしまかさきに横山本 横山敬次郎氏蔵・平瀬本
伝花園印又ハ称光天皇真筆等 ↓【河内本】こしまかさき御物本 東山御文庫蔵【別本】こしまいろ陽明家本 ↓こしまかさき国冬本 伝空雅筆 桃園文庫蔵
君にそまよふみちはまよ (国「と」) はす ↓【青表紙本】(まとふ池田本 ↓まよふ榊原家本 伝二条為氏筆 榊原子爵家蔵 / まとはす池田本ーまよ(と) はて(す) 榊【河内本】道にまよはず御物本 東山御文庫御蔵 ↓【別本】まよはず陽表くちせしを(たえせしと) ↓くちせしを【青表紙本】・【河内本】 ↓【別本】たえせし高松宮家本 冷泉政為筆 高松宮家御蔵・陽明家蔵 近衛公爵家蔵・国冬本 伝空雅筆 桃園文庫蔵

七ノ47

七ノ52 ころともしらて (各同)ーころともしらす【青表紙本】 ↓【別本】しらて宮陽国麦生本 麦生鑑綱筆 桃園文庫蔵

八ノ2

手にはとられぬ(京・国「す」 ↓【青表紙本】とられず) はかなくて (大英博・京 典拠不明 国「みればなし」 典拠不明)ーみれば又【青表紙本】・【河内本】・【別本】

九ノ9

はやくしはやくしはやくしを【青表紙本】(大島本底本) 飛鳥井雅康筆 大島雅太郎氏蔵・河・別く誰かと、めん(し) ↓たれかと、めし【青表紙本】・【河内本】・【別本】

九ノ11 なかむる袖に露そこほるゝ(各同)【青表紙本】な
かむる袖に露そみたるゝ ↓こほるゝ 伝二条為氏筆
静嘉堂文庫蔵―【別本】袖―そら宮国

九ノ21 人こそなけれ(三本同 典拠不明)―【青表紙本】人
こそみえね 【別本】人こそあらね国冬本

十ノ4 のりのしと(国「も」―典拠不明) ↓ふみまよふかな
(大英博・京・国) ↓のりのしと【青表紙本】・

【河内本】・【別本】/ふみまとふ【青表紙本】(池田
本底本)・肖柏本 牡丹花肖柏筆 桃園文庫蔵 ↓
【河内本】ふみまよふ七毫源氏 伝頓阿筆 東山御
文庫御蔵

右の作業を通じて、三書とも青表紙本に一致する場合、河内
本あるいは別本に合う場合、いずれにも合わない場合等まちな
ちで、顕著な傾向は見いだせない。

まとめ

点検を通して見えてきたことをまとめてみる。第一系統第一
類の各書は、大きく異なる箇条は含まず、多少の出入りはある
が、大方一致する文である。これは各書が共通の祖本に基づく
ものであり、書写の過程で付加や省略(目移りによる誤写・誤
認も含む)が行われた結果であろう。ただし大英博物館本と他
の二作品との直接的な書承関係は指摘し得ない。

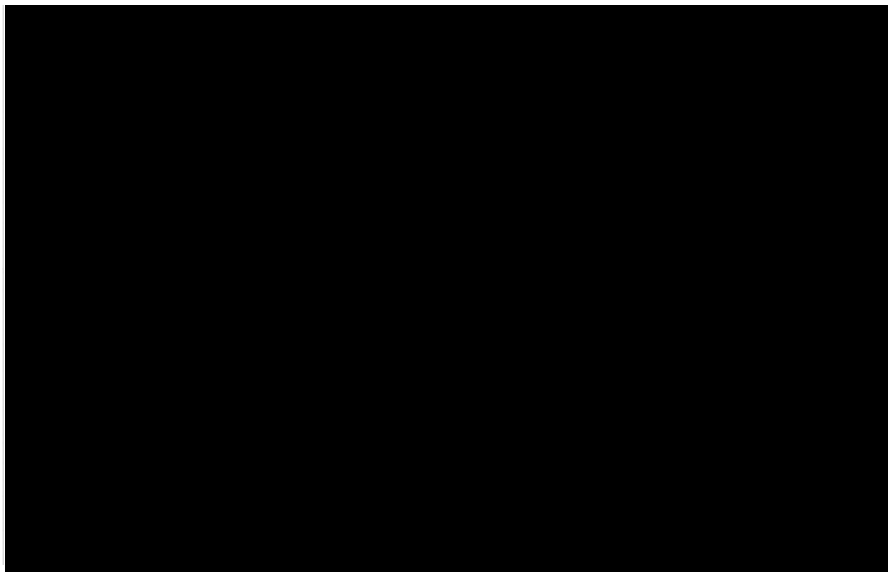
「三イ」の例より大英博本・京大本が、国会本にない文を有
する事実は、大英博物館本が国会図書館本の増幅化であるとは

想定しにくい。また、「七ノ35」大英博本・京大本「みちはま
よ(国「まと」はす)は、【別本】まよはす(陽明家本・麦生
本)に、国会本は【青表紙本】まよはす(池田本底本)に一致
し、国会図書館本と他二書との離れをうかがわせる。それに対
し「三八」の例から大英博物館本は、京都大学附属図書館本の
簡略化あるいは誤脱の場合はないだろう。

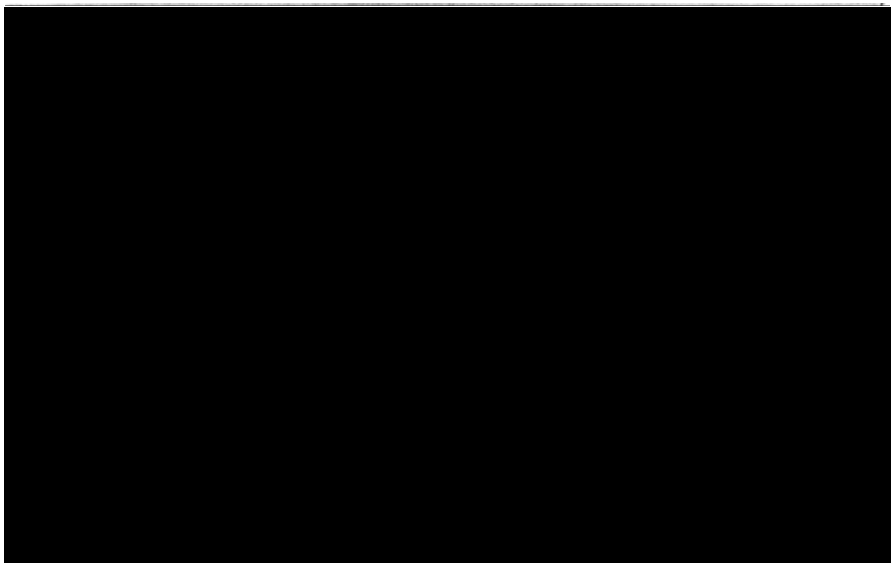
大英博物館所蔵
『源氏物語小鏡七』
JP119 縦29.0糎

| 紙数 | 横(糎) | 絵 | 詞(行) |
|------|---------|----|------|
| 第1紙 | 66.8 | | 22 |
| 第2紙 | 34.7 | | 14 |
| 第3紙 | 45.3 | 絵一 | |
| 第4紙 | 68.4 | | 27 |
| 第5紙 | 68.7 | | 29 |
| 第6紙 | 68.2 | | 29 |
| 第7紙 | 68.7 | | 29 |
| 第8紙 | 68.0 | | 29 |
| 第9紙 | 49.0 | | 21 |
| 第10紙 | 29.3 | | 7 |
| 第11紙 | 47.6 | 絵二 | |
| 第12紙 | 48.8 | | 17 |
| 第13紙 | 45.1 | 絵三 | |
| 第14紙 | 68.6 | | 27 |
| 第15紙 | 49.6 | | 21 |
| 第16紙 | 20.6 | | 5 |
| 第17紙 | 46.0 | 絵四 | |
| 第18紙 | 68.7 | | 24 |
| 第19紙 | 46.4 | 絵五 | |
| 合計 | 1,008.5 | | 301 |

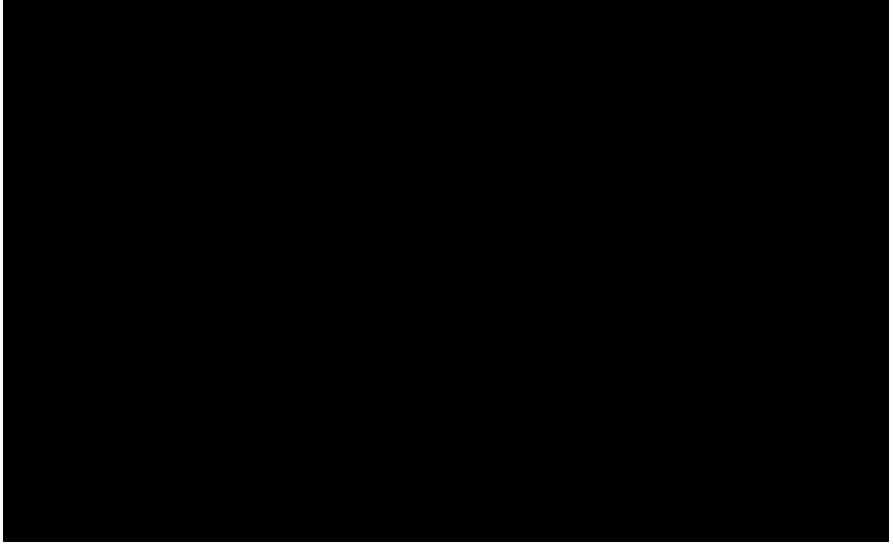
見返し 31.4 軸付紙 0



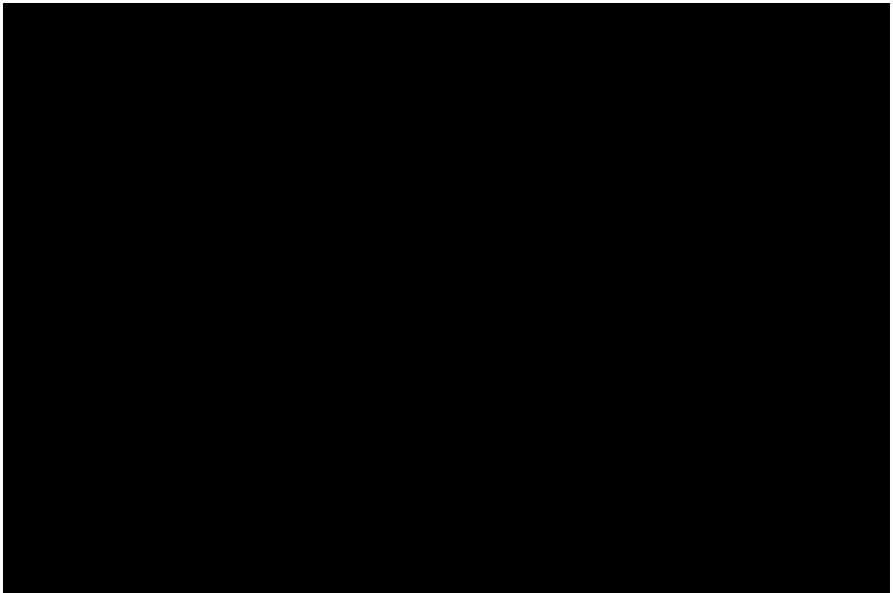
第一紙



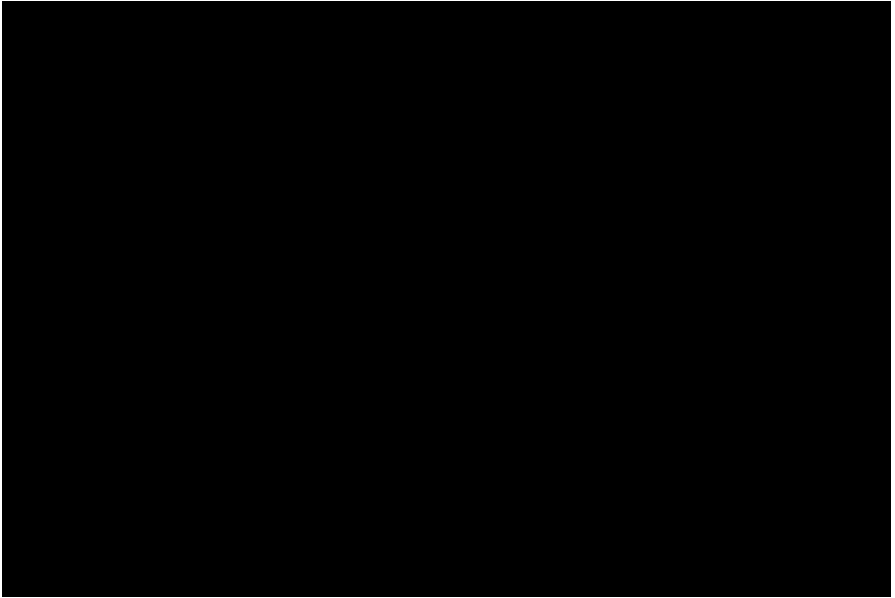
絵一



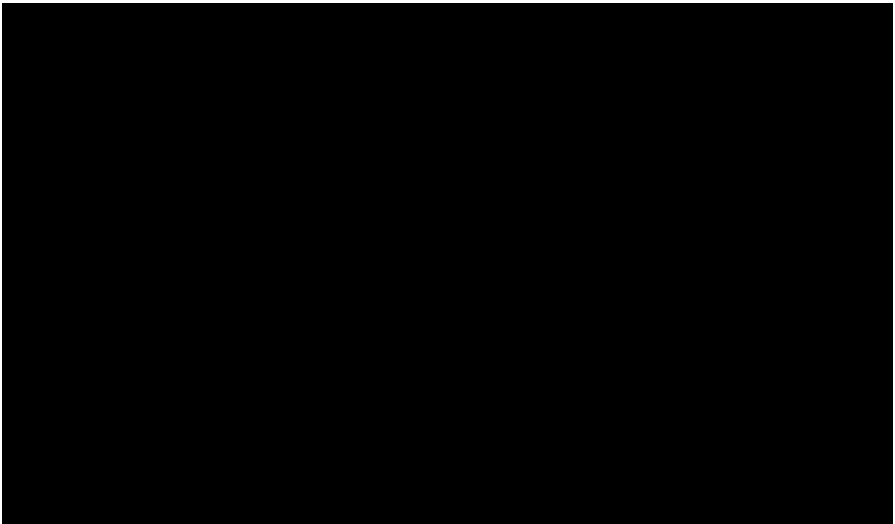
絵二



絵三



繪四



繪五